



「理解と同意」 これが実態

■もう黙ってられない！ 50人がアピール

JR 東海は11月1日に上蔵の坑口予定地周辺で、起工式を行ないました。阿部知事や近隣の首長、柘植康英社長も参列する中、小渋橋のもとで、朝早く50人近くの住民が、会場に向かう車列に向かって抗議のアピールをしました。どんなに工事への不安や疑問を説明会で訴えても、JR 東海は「やらせてほしい」と言うばかり。疑問も解消されないのに着工なんて……JR 東海のやり方に、「もう黙ってられない」と集まって来たのです。



■村と議会の同意 = 「住民不在の密室談合」

柳島村長と村議会は10月21日に南アルプストンネルの本体工事の着工同意を JR 東海に示しました。JR 東海は、「理解と同意が得られなければ工事には取りかかれない」と私たちに説明してきました。そのため、説明会でいくら疑問や不満が出て、終われば JR 東海の澤田尚夫部長は「理解が深まった」と記者発表し、帳尻を合わせてきました。

驚いたことに、こういった住民の不安や不満を村も議会もくみ取ることなく、住民に非公開の全員協議会で同意を表明しました。村の顔役たちは、住民に見せることなく JR 東海と確認書を結び、住民に諮る必要があると言いつつ、わずか2日間ホームページで掲示して議決を取りました。議会は4対3で同意したと言いますが、挙手による採決がなされたかどうかはわかりません。熊谷英俊議長は、「もっと議会で審議する時間がほしかった」とまるで自分が被害者のように朝日新聞(2016.11.2)にコメントしています。村と議会在 JR のために露はらいをしたのは明らかです。いったい誰のための村長と議会でしょうか。

■住民「説明してほしい」VS JR「事務所へ行け」「警察呼ぶぞ」

小渋橋でアピール後、30人近くの住民が式典会場に移動しました。村や住民にかかわる式典なら、住民こそが招待されてしかるべきですが、会場では番号を首から下げた警備の職員が出迎え、式典への出席を拒みました。責任ある立場の人を出してほしいと那些人たちに言っても、「要望は大鹿分室で聞く」と取り次ぎません。ところが、分室の長田さんやいつも説明会で雑段に並んでいる社員の姿が会場に見えます。「こんな対応おかしい」「丁寧な説明をするように国土交通大臣も言っている」と訴えても、誰もまともに答えません。結局無言の警備の職員に住民が話しかけたままの状態が続き、式典終了後も30分、車列は会場内に留め置かれました。スーツ姿の社員は後方で「警察を呼ぶ」と住民を恫喝し実際に呼びました。JR 東海の社員が対応しないので、客として呼ばれた来賓が車から降りて住民に対応する羽目に。これが「住民とともにある」JR 東海の実態です。こんなやり方、あなたは同意できますか。



●●●●●
☑大鹿リニアを止める実行委員会 通信第3信 2016.11.15

TEL 0265-39-2067 (宗像) メール munakatami@gmail.com

●●●●●

開通直前！？ 「ああ、大鹿ダンプ街道」

かつての山砂採取地に積まれた残土（君津市）

10月30日、鹿塩の交流センターで千葉県から佐久間充さん（女子栄養大学名誉教授、保健社会学）と佐々木悠二さん（元高校教員、小櫃川の水を守る会事務局長）を招いて学習会を開催し、40人が参加しました。

9月の村議会に、「リニア事業への反対を求める陳情」が村議会に提出された際、議員の中から「10年たったなら静かな大鹿村に戻る」「残土は有効活用できる」と陳情を否定する理由が挙げられました。今回の学習会は、こういった期待が本当かどうか、一日4000台のダンプの通行がある千葉県君津市で研究にあたった佐久間さんと、現地で行くつも開発計画を止めた佐々木さんに実際に聞いて確かめるために企画されました。柳島村長によれば、大鹿村では現在でも一日1000台のダンプの通行量があると言います。リニアの工事が始まれば、最大で1700台余のダンプが通るので、合わせて最大2700台の通行量だとすると、君津市のダンプ街道と比較できます。



「山が消えて山ができた」

佐久間さんには、1970年代から房総半島の君津市や木更津市を調査して報告した、岩波新書の『ああダンプ街道』という著書があります。房総半島は良質の山砂が採れ、東京湾の埋め立てや高層ビルの材料として大量に搬出され、例えば羽田空港の第3滑走路の建設工事に伴い、木更津では3車線+3車線の道路がすべてダンプで埋まりました。交通事故による死者も大勢出て、子どももはねられています。当時道路は未舗装だったので、粉塵であたりが真っ白になり、じん肺になる危険性もあったと言います。道に落ちた粉塵はダンプに踏まれて細くなり、家の中の押し入れも砂だらけにし、アルミサッシをしていても無駄。佐久間さんは「お前が来るとくせえ」と言われた街道地域の方もいたことを報告していました。母親たちがダンプの前に寝転がって、通行を止める場面を佐久間さんは何度も見えています。

君津市では、1980年代までにいくつもの山が削り取られてなくなりましたが、その後1990年代になると、そこに残土や産廃が持ち込まれ、各地で受け入れを巡って住民と業者の間で「残土・産廃戦争」（岩波新書『山が消えた』に詳しい）が起きました。

「残土」はやっぱり「産廃」

その残土・産廃戦争を現地で闘ってきたのが、佐々木さんでした。山砂採取地に出所不明の残土が持ち込まれ、このままでは君津市は残土と産廃で埋め尽くされると立ち上がり、県外からの残土の持ち込みを禁止する独自の残土条例を作るのに、佐々木さんは尽力しています。というのも君津市は度々残土に悩まされてきたからです。

1990年ごろ、残土が私有地の里山に積まれると、近くの集落の簡易水道の水が黒くなりました。しかし残土との因果関係を証明できず、君津市は6000万円をかけて水道を引いています。また2000年ごろには、残土が里

山に積まれると、集落の井戸が濁れる被害も出ています。佐々木さんの住む小糸地区では、住民運動で、山砂・残土業者と協定書を結んでいましたが、残土の検査をするのは残土業者が指名した業者でまったく信用できません。産廃なら規制する法律がありますが、残土には法律がなく、自治体の条例で対処するしかなかったのです。

フロアから佐々木さんに、「残土は産廃なんじゃないか」という質問が出ました。「そのままの状態では掘り出される土は〈残土〉だが、シールド工法などで、水や石灰、薬品などでドロドロになって出てくるものは残土ではなく〈産廃〉」と佐々木さんの答えは明快でした。佐々木さんは「残土はよくて置ける」と付け加えました。積みば崩れるし、汚染など必ず問題が起きるといなのです。

大鹿「残土・産廃戦争」？

佐々木さんは「私が住民なら、地区ごとに連絡を取り、共通の協定書を作り、これを守らないと着工させないと事業者にも約束させます。みなさんでまとまればできます。長野県には残土条例がありません。ということは、この大鹿村で村の残土条例を作ればいいのです」と強調していました。君津市でも木更津市でも、条例改正後、新たな残土の持ち込みは1件もありません。住民に知らせずJRに着工させるために村と議会が協定を結び、三六災のかつての被災地に「産廃」（残土）置き場を提供する大鹿村の現状とはかけ離れていますが、かつては君津市も今の大鹿村のようだったのかもしれない。道がよくな

り大鹿村で「残土・産廃戦争」始まったら、引金を引いたのは、リニア反対陳情を否決し、着工同意した議会と柳島村長です。

